

国際感覚を身につけるための 英語教育のあり方を探る

早稲田佐賀中学校・高等学校の実践

確かな語学力に裏打ちされ、広い視野から判断する国際感覚を身につけた人材の育成をめざす早稲田佐賀中学校・高等学校では、国際研修やオンライン英会話を積極的に導入している。明確な理念に基づく英語教育の実践をレポートする。



早稲田佐賀
中学校・高等学校
南 貴之 教諭

国際研修とオンライン 英会話の実施

英語教育において同校がめざすのは、「大学での学問研究や

早稲田大学を建学した大隈重信の出身地である佐賀の地に、2010年に開校した早稲田佐賀中学校・高等学校は、その教育の特色の1つとして「国際交流を通して世界で活躍できる人材の育成」を掲げている。グローバル化が進む現代にあつて、英語などの語学力を身につけることはもちろん、広い視野から物事を判断する国際感覚を身につけることを重視している。そのため、英語教育を充実させるほか、海外語学研修などを積極的に導入してきた。どのようなねらいで、具体的にどんな教育を実施しているのだろうか。

その先の国際社会で通用するような、論理的で正確な英語力を育成すること」だ。4技能のうち、「読む・聞く」では英語の基本的な論理構成を理解し、アカデミックな英文を正しく理解する力、「書く・話す」では、自らの考えを正しく表現する力をつけることをめざしている。

英語力を身につけるには国際研修が効果的であることから、中2〜高3の各学年で、オーストラリア、フィリピン、シンガポールなどの機会を設けている。中でも、中3での約2週間のフィリピン語学研修は全員参加とされている。そのねらいについて、同校英語科の南貴之教諭は次のように言う。

「中学校課程を修了するタイミングで異文化間コミュニケーションの楽しさと難しさを経験することで、自らの英語力の伸長を体感するとともに、その後の英語学習への意欲を向上させるねらいがあります。生徒たちにとっては、教室での語学の学びと同様かそれ以上に、授業外での現地の方々のかかわり合

いの中で、社会的、文化的な差異についての見識を深められたことが印象的だったようです。それは、『英語で学ぶ』ということだったと思います」

国際研修に備える意味もあり、生徒たちは、年間15回のオンライン英会話を受講している。

以前、中学校ではネイティブスピーカーによる1対20の少人数授業を実施していたが、生徒1人当たりの発話量が少ないことが課題だった。また、大学入試改革による4技能型の試験への対応が求められる中で、個別対応が必要なスピーキング指導への対応が求められていた。

「スピーキングの経験値を上げることをねらいとして学研オンライン英会話を導入しました。1対1のレッスンを通じて、コミュニケーション能力のうち特に「strategic competence（方略的能力）」の高まりに期待しました。社会的・文化的背景を異にする外国人を相手に何とかしてコミュニケーションを成功させようとする体験を、学校の教員とのやりとりの中でする



中3生のフィリピン語学研修。

は難しいものですから。
学研オンライン英会話の利点として、カリキュラムを柔軟に設定できることが挙げられます。また、講師がアジア人であることで英語が『アジアの共通語』でもあることをも認識でき、地域ごとに特徴のある英語に接することは、生徒たちが日本人として英語を話すことへの自信にもつながるでしょう」（南教諭）

大学で求められる英語力を身につける実践も
早稲田大学の系属校である同校では、卒業生の約半数が推薦で早稲田大学に進学する。高3



授業内でオンライン英会話を受講している生徒。

生の早稲田大学推薦候補者に対しては、「ロジカルスピーキングトレーニング アドバンスト」を実施している。これは、「生徒には制服が必要であるか」「すべての自動車は自動運転化すべからぬか」などのトピックについて「主張↓根拠↓結論」という型を繰り返し練習することで、英語でロジカルに説明するためのスキルを定着させるレッスンである。

「大学での研究活動の基盤となる力の一つとして、自らの主張と論拠を明確に示しながらまとまりのある文章を書く力が挙げられます。『ロジカルスピー

キング』には、身の回りの社会問題についての自分の考えを英語で伝える訓練が段階的に設定されています。社会的・文化的背景を共有しない相手に、どうすればより正確に自分の考えが伝わるか、生徒が主体的に学びを深めることを大きなねらいとしています」（南教諭）

コロナ禍でオンライン授業を実施

2020年3月以来の新型コロナウイルス感染症の流行に伴って、同校でも学校生活や授業へのさまざまな制約を余儀なくされた。生徒の6割が寮生という事情もあり、同地域の他校よりも長期間生徒の登校ができない状況だった。そこで、4・5月はオンラインによる遠隔授業を導入、学年ごとに1日4・5時間の時間を設定し、授業動画の配信、事前に郵送した紙媒体による課題やウェブ配信された課題・小テストへの取り組みなどを実施した。生徒は自分の苦手分野については動画を一時停止したり繰り返し視聴した

りと、自己のペースで学習できるというメリットがあったが、どうしても怠惰に流れやすいという面もあったという。

「オンライン授業は、文法の導入やパターンプラクティスなど、学習者がアクティブになれるタイプの授業には向いていると思います。一方で長文を扱う演習など一方的に話す時間が多くなってしまうタイプの授業は、生徒の集中が続かなかったと思います。」

教員は、授業動画について、普段の授業以上にミスのないように細心の注意を払って作成し配信しました。この工程は、教員同士の意見交換や議論の機会ともなり、教員研修になりました」（南教諭）

9月以降、通常の学校生活に戻りつつある中ではあるが、職員会議や保護者を含む三者面談などでは、オンラインでの実施を増やしていく予定だという。先を見通しにくい状況ではあるが、確固とした理念に基づく英語教育は、今後もぶれることなく続けられることだろう。